

巨人荒野

陽羅義光

第四部／第一章

宗教は阿片だ
マルクス

立派な人間であることは困難だ
ピッタコス

二〇三一年、十月三十日、午前五時。

西園寺邸の縦横十メートル巨大な直方体の地下室に、荒野大三郎は居る。
金時のマスクではなく、黄金仮面をかぶっている。

そばには電撃小僧とその手下が四人。

「荒野様、フランコ氏は亡くなりました」

電撃小僧が簡潔に報告すると、荒野は静かに瞑目し、

「教授ハ立派ニ、役目ヲ遂行シテクレタ」

荒野の声は、以前より更に厳粛になっている。

「荒野様、ひとつ質問があります」

「遠慮ハ要ラヌ」

「犠牲者を出してまで、カトリーヌを連れ戻すことは、重要なのでしょうか」

「ソレハ蝶子ニ聞クトヨイ。

私ハ、愛妻ノ願望ヲ、全力デ、叶エルノミダ」

「蝶子様はお聞きしても云いますまい。

望外の報酬を戴き、云いにくくはありますが、我らはお役ご免で、よろしゅうございますか」

「無論ノコト。

ダガ、君達ハ、簡単ニハ棲ニ帰レマイ」

電撃小僧は身構えた。

「荒野様は、我らのことも、役目を終えた不要物とお考えなのですか」

「ソウイウ意味デハナイ。

君達程ノ手練ハ、ソウハ見ツカラナイ。

見ツカッテモ、手元ニ置ケヌモノヨ。

ナゼナラ、君達ハ命シラズデ自由自在ノ、必殺仕掛人ダカラダ。
ダガ、君達ヨリ遙カニ、命シラズノ男ガイル。
コノ男ニ匹敵スルノハ、神風特別攻撃隊ノミダ。
シカモ、誰ガ命ジタノデモナイ。
コノ男ガ、君達ノ巨大ナ敵トナロウ」
「その男の名は」
「聞イタコトハアルマイガ、麻暮正作」
「聞いたことはあります。
ギャバンが、最期にさげんでいました。
よく覚えておけよ、麻暮先生がお前達を皆殺しにしてくれる」
「ソウダ、ソノ麻暮サンガヤッテクル。
イヤ、既ニヤッテキテイルカモシレヌ」
「ちなみに、荒野様はどうして、そんな殺人鬼を麻暮さんとよぶのですか」
「ソレハ、私ノ義兄ダカラ」
「ならば、墓場の近い超老人でしょう。
無敵を誇る、我らの敵とはおもわれませんが」
「墓場ノ近イ超老人トハ、私ノコトデモアルナ」
黄金仮面は明らかに苦笑していた。
「荒野様は特別でございます」
「特別トハ、麻暮サンノ為ニ、使ウ言葉ダ。
無敵ノ兵達ヨ、肝ニ命ジルガヨイ。
油断シタトキハ、一網打尽ニサレルトキダ」
電撃小僧は身構えた。

このとき、蝶子とカトリーヌは六畳ほどの屋根裏部屋に居る。
カトリーヌは、居ると云っていいのかどうか。
朧る、正確には朧られている、と書いたほうがいいかもしれない。
尤も文字通り、男ふたりで女をいじめるのではない。
女ひとりで、女をいじめているのである。
すでに全裸のカトリーヌは、緊縛ゲームさながらの姿で、天井から吊るされている。

蝶子はカトリーヌの猿轡をはずし、
「どんなに泣き叫んでも、ここは外に聴こえない密室よ。
これから私が何をするか、お解りになるかしら」
カトリーヌは唇を噛んで応えない。
何も云わないことを自分に課しているのだ。
あるいは云いたくとも烈しい震えのせいで云えないのだ。
「いくら意地を張っても、だれも助けにこないのよ。
もちろんあの人もね。

あなたのことは関知しないと云っていたわ。

関知って日本語ごぞんじかしら。

まったく関係がない人間だってことなの」

蝶子は云いながら鋭利な刃物を取り出す。

「命を取らないのは、薄命の美人は崇拜の対象になってしまうからよ。

その代わり麻酔なしで、切り刻ませてもらうわ。

いくら美容整形が発達しても、どうにもできない疵というものがあるのよ。

それをこれから三箇所やらせてもらうわ。

三箇所とは、顔と乳房と陰部。

どうして三箇所かというと、あなたが私を侮辱したのが、三回だからよ。

おや、そんなことはしていないって顔ね。

それなら、私が教えてあげましょう。

一つ、私のあの人を誘惑したこと。

二つ、私のあの人を追ってパリまで行ったこと。

三つ、私のいままでの厚意を裏切ったこと」

蝶子の面相は尋常ではない。

おそらく本人も気づいてはいまいが、般若になっている。

蝶子が刃物を構えると、ここで初めてカトリーヌが口を開く。

「一つ、わたしはコウヤさんをユウワクなんかしていません。

ただのひとりの、コウヤさんのシンジャにすぎません。

わたしはコウヤさんをソクケイしていますが、チョウコさんのコウヤさんへのアイは、まったくのどとどかない、べつのセカイのものだとかんがえています。

二つ、パリへかえたのは、コウヤさんをおっていったのではありません。

チョウコさんがこわくなって、できるだけとおくへにげたかったのです。

あんなにやさしかったチョウコさんが、なんだかオバケみたいになってしまったとかんじられたのです。

三つ、チョウコさんのコウイをうらぎるなど、おもったこともありません。

ニッポンでとてもよくしてもらって、ねえさんみたいにおもっていたのです。

わたしにはねえさんがいますが、ほとんどあえずにいました。

チョウコさんがいつもそばにいてくれたから、わたしはいつもあんしんしてくらせたのです」

カトリーヌの言葉を、蝶子はほとんど聴いてはいなかった。

目の前の獲物を切り刻むことの、使命と興味と欲望とが頭のなかで渦巻いていた。

そのとき蝶子にとって、青天の霹靂が起こった。

何の前ぶれもなく、蝶子にとって地震よりも脅威で、津波よりも忌わしい、災害が起こったのだった。

自分と獲物の間に、鉄仮面天井から降ってきたのだ。

「ケケケ」

と無気味な笑いを聴いたときは、蝶子の意識はすでに暗闇のなかだった。

まずカトリーヌの緊縛を解いた麻暮は、次に蝶子を全裸にむくと、その衣類をカトリーヌに渡した。

「非常口を作っておいたから、カトちゃんはそこから逃げて、郷田さんのところへ戻りなさい。

電車も動いている時間だけど、一応外に乗ってきたタクシーを待たせておいたよ。

ボクはまだ大仕事が残っているから一緒はできないけど、郷田さんがきっと守ってくれるから、何も心配は要らない」

カトリーヌは力強く頷いた。

それから十分も経たずに、全裸の蝶子を抱えた麻暮は、地下室の鉄扉の前に立っていた。

「ケケケッ、荒野よ、ボクだ麻暮だ。

聴こえるか、聴こえたなら、この扉をすみやかに開けるがよい」

地下室のなかで電撃小僧が荒野を視る。

「開ケルシカアルマイヨ。

開ケナイト、扉ヲ爆破スルニチガイナイ」

荒野が溜息まじりに云うと、電撃小僧は子分に開けるよう命じた。

重い扉が開かれると、麻暮は平然とした様子で入ってきて、荒野の前で腕のなかから蝶子を落とした。

「君とちがってボクは、人質を取るような姑息な真似はしないよ。

ケケケッ」

「死ンデイルノデスカ」

「あと一時間は死んでいる。

だが十分以内に人工呼吸をしないと、永久に死ぬ。

殺したいほどのことをした女だが、困ったことに死んだ麗子の従姉だからね」

「ソレデ麻暮サンハ、私ニ何ヲ要求シタイノデスカ」

「当たり前のことさ。

郷田さんの代わりに、ギャバン君の仇討をね」

そのとき電撃小僧の合図で、子分達が動いた。

手に手に様々な武器を持ち、麻暮に襲いかかったのだ。

それでもだれひとりとして、麻暮の肉体に届かなかった。

カワカミジェットによって、みな粉碎されたのだった。

人間の焦げた臭いが、地下室に充満した。

「ケケッ、これでギャバンの仇討がすんだとおもったら、とんだ大間違いだよ」

荒野は仕種のみで、電撃小僧をたしなめた。

それからやはり仕種のみで、電撃小僧に命じた。

電撃小僧は舌打ちしてから、地下室を出た。

「麻暮サン、実ハ仇討ハ要ラナイノダ。

私ハ蝶子ガ心配ダカラ、コレデ失礼スル」

「そうそう、荒野よ、奥さんに伝えておいてくれ。

約束の後払い金は、一億円にまけておくとね」

「承知シマシタ」

荒野は蝶子を抱えると出て行き、代わりに電撃小僧がギャバンを連れて戻ってきた。

「ごめんなさい」

ギャバンは麻暮に深く頭を下げた。

身体のどこも、傷んでいそうになかった。

「無事だったのか」

麻暮には喜びよりも驚きがあった。

(そうか、あのメールは、郷田さんとボクをおびき寄せる、手管だったのか)

百戦錬磨の麻暮がまったく予想もしていなかった理由は、送り主が知らない人物であったことと、文面に真実性がこもっていると感じたからのと、郷田の烈しい嘆きに冷静な判断を失ったからであった。

「荒野様のご命令なので奴は返すが、いずれ子分の弔い合戦をやらせてもらう。

あらかじめ伝えておくが、倒れている連中はわが配下の、ほんの一部にすぎない」

電撃小僧は云い棄てて去って行った。

二〇三一年、十月三十日、午前八時。

郷田は麻子を抱いて、カトリーヌと話をしている。

郷田は応接間を行ったり来たり、カトリーヌはソファに坐って郷田が入れたコーヒーを飲んでいる。

「それで、荒野大人の洗脳は解けたというのね」

郷田が聞くと、カトリーヌは首をかしげ、

「センノウは、どういういみですか」

「要するに、荒野大人のしがらみはなくなったのね」

「しがらみは、どういういみですか」

「まあいいか、あたしにもどういう意味か正確には解らないんだから」

「ただ、みなさんゴカイされています。

わたしはコウヤさんをソクケイしていますが、コウヤさんのドレイになったことはありません」

「まあいいか、とにかくカトリーヌちゃんは、明日にでもパリに帰るのがいいね。

マドレーヌちゃんも無事で、またMC病院で働くと云っているわ。

でもこれからは、カトリーヌちゃんと同じアパートで暮らしたいとも云っているわ」

「ギャバンがしんばいだから、わたしはかえりません」

「だったら、あたしだって麻暮さんが心配だから帰らない、って云いたいけれど、帰るとこなんか無いわ」

郷田はユーモアのつもりで云ったのだが、鼻息が荒かったので、カトリーヌは首をすくめ、

「ごめんなさい」

そのとき玄関に人の気配。

郷田は麻子とカトリーヌを守る仕種をしたが、入ってきたのはギャバンだった。

「ただいま、郷田さん、カトリーヌ、麻子ちゃん」

郷田が目を丸くして、

「あらま、どうして生きているのよ」

「ぼくも麻暮さんに助けられたんです」

ギャバンは照れ笑いをした。

「死んでなかったのね」

郷田は涙目になった。

「ぼくは、死にましえーん」

云いながらギャバンは郷田にハグをした。

「大昔に聞いたセリフだけど、まあいいか。」

嘆き悲しんで損しちゃったわ」

「麻暮さんに聞きました。

早く帰って、郷田さんを喜ばせてあげてくれって。

でも、麻暮さんって、どういう人なんでしょうね。

カトリーヌもぼくも、生きて帰れる望みは、まったくありませんでした。

現代の日本にも、スーパーマンはいたんですね」

「スーパーマンは超能力者でしょ。

麻暮さんは老骨に鞭打ってるのよ。

スーパーマンにとって死なんか別世界のものですよ。

麻暮さんはいつも死と隣り合わせよ」

「はあ、そういうものですか」

郷田は玄関の方を視て、

「その麻暮さんはどこなのよ」

ギャバンは郷田から麻子を抱き取り、

「海の方を散歩するって。

ロマンチックな人ですねえ」

(そうではない)

郷田はおもった。

(生きて帰れたら、あたしとまた散歩したいって)

郷田はぼろんと涙をこぼした。

「じゃ、あたしも散歩に行くから、ふたり仲良くコーヒーでも飲んで、帰国の相談でもしといてちょうだい」 ギャバンはカトリーヌと目を見合わせた。

郷田は外へ飛び出した。

二〇三一年、十月三十日、午前九時。

麻暮正作は鵜沼海岸にいる。

朝日を浴びながら水平線を視ている。

いずれ電撃小僧が、多数の子分を従えて襲ってくる。

そのときの対策を考えているのだ。

カトリーヌとギャバンはパリに帰す。

麻子は信用のおけるベビーシッターに預ける。

(さて、郷田さんは)

そこで詰まった。

(どこかマンションを借りて、そこで作家活動をしてもらいたいが、正直に理由を告げたら何と云うか)

麻暮には答は解っていた。

「作家活動を中断して迎え撃つわ」

と云うに決まっている。

(さてどうするか)

その案がでるまでは、郷田邸に戻れないから、ここに来たのである。

まだ思案中なのに、郷田が来てしまった。

「麻暮さーん」

甘い声を出して、背中に抱きついてきた。

「ケケケ、来たの」

と云うと、鼻を鳴らして、

「うーん、来るの当たり前でしょ。」

朝の海もいいでしょ」

「ああ、わるくないね」

「麻暮さんたら、わるくないだなんて、どうして素直にいいと云えないのよん」

「ああ、いいね」

もう思案どころではない。

「あたし、もうサヨナラかとおもって」

「ケケケ、ボクも、そうおもっていたよ」

「この不死身野郎」

麻暮は郷田の眼が赤いのを窺って、

「ケケケ、郷田さんのおかげで、生還できたんだよ」

「このお世辞上手」

だが、まんざら嘘でもなかった。

ギャバンが生きていることを知ったとき、ギャバンを郷田の元に帰してあげるのが先決だと考えた。

そうでなければ、できるできないにかかわらず、荒野も電撃小僧も抹殺しようとしたにちがいない。

そうした場合は、逆に抹殺される可能性もあるということだ。

「あたしさあ、じつは、麻暮さんに告白することがあるの」

ふいに郷田が口走った。

「おいおい、恋の告白だったら、勘弁してくださいよ」

「それがねえ、それに近いかな」

しかし、郷田はその先をなかなか云わなかった。

痺れをきらした麻暮が、

「じつは、と云いだして、黙っちゃう人って、どうおもう」

少々厭味を云うと、

「ごめんね、あたしは、いえ、ぼくは、カミングアウトしたいの。

ちがうちがう、逆カミングアウト、かな」

「意味がわかりません」

「そうでしょうね。

ぼくだって、三時間前には、こんなことになるなんて、おもいもしなかったもの」

「こんなことって、どんなこと」

「だから、恋の告白、そして逆カミングアウト」

「つまり」

「つまり、カトリーヌちゃんに惚れちゃった。

ひどい女嫌いのあたし、いやぼくが、カトリーヌちゃんに惚れちゃったんです」

「それって、いわゆるレスビアンじゃないの」

「かもしれないけど、そうはおもいたくない。

だから、おもいきって逆カミングアウト。

オカマからの卒業」

「ちょいと信じられませんがねえ」

「ぼくも信じられない。

しかも、カトリーヌちゃんのあの抜群の容姿に惚れたんじゃない。

触れあっているうちに、なにか、そう天啓みたいなものに打たれてしまって。

うまく云えないけど、カトリーヌちゃんの純粹さ、それと、カトリーヌちゃんの孤独に、たしかに打たれた。

だから、惚れたって言葉はちがうのだろうけど。

ぼくもいい歳で、十八の女性と結婚なんて、虫のいいことは考えてもみないけど、同じ世界の住人と、同じ住処に居たい、そういう感情が湧いてきてとまらない」

麻暮は戸惑いつつも、なにか云わないといけないとおもい、

「郷田さんのおもいは解る気がするし、いや、いかにも郷田さんらしいとおもうが、カトちゃんのほうはどうなのかね。

もうギャバン君と、できちゃっているかもしれないよ。
だってボクらが、そう仕向けたんだからね」
郷田はおおきな溜息をひとつついてから、
「ぼくもそうおもっている。
だからギャバン君とカトリーヌちゃんを、一緒にパリへ帰したい」
「それでいいのかい」
「そうするしかないね。
けれど、カトリーヌちゃんには感謝している。
まがりなりにも、ぼくを、逆カミングアウトさせてくれたんだから」
「それでいいのかい」
「それでいい、それでいい」
「たしかに、郷田さんの云うところの、カトちゃんの純粹さと孤独は、ギャバン君
に委ねられるんだからね」
「それでいい、それでいい」
何度も頷きながら、郷田は海の上の太陽を直視した。(ぼくは作家として生まれ
変わる。
ぼくは男性として生まれ変わる)
「ケケッ、となると、ボクたちは異性間の友情関係ではなく、同性間の友情関係に
なるんだね」
麻暮の言葉に即座に、
「うん」
と応えてから、
「人間っておかしなものです。
なにかを得るとなにかを失い、なにかを失うとなにかを得る」
「そう、ボクなんぞ、長い生命を得て、とても多くを失った」
自嘲気味に云った麻暮は、郷田の肩を軽くたたき、
「どうかね、戻って、カトちゃんとギャバン君の明日を祝おうじゃないか」
(電撃隊対策は、そのあとにしよう)
「うん」
郷田は歩きだした麻暮のあとを付いて行った。
郷田邸に戻ると、ギャバンとカトリーヌがなにやら議論をしている。
とは云え、怒鳴りあったりしているわけではなく、お互いが哀願調で喋っている。
「ケケ、もう夫婦喧嘩かい」
麻暮が茶々を入れると、ギャバンが郷田に向かって訴える。
「カトリーヌは、せっかく助けてもらったのに、パリに帰るのがイヤだと云うん
です」
するとカトリーヌは、麻暮に向かって訴える。
「ギャバンは、せっかくたすけてもらったのに、パリにかえるのがイヤだというん
です」

「いやはや、ケケケ。

それならとりあえず、日本でふたり一緒に暮らせば、ちっとも問題ないじゃないか」

自然な疑問に、カトリーヌは麻暮の腕を掴んで、真剣な眼を向けてくる。

「マグレさんは、とてもゴカイしています」

誤解の内容が解らず、ギャバンに眼を向けると、

「じつは、麻暮さん、カトリーヌがパリに帰りたがらないのは、郷田さんと別れたくないからなんです」

「ケケケ」

ではなく、おもわず、

「ゲゲゲ」

とさけぶと、こんどはカトリーヌが、

「じつは、マグレさん、ギャバンがパリにかえりたがらないのは、ゴウタさんとわかれたいからなんです」

「ゲゲゲ」

とまたさけぶしかなかった。

(つまりその、ふたりはできてなんかいなかったのか)

「どうも、最近のボクの推理は、外れることが多いなあ」

つぶやきつつ郷田を視ると、赤くなって俯いている。

いままでのオカマのふてぶてしさは微塵もなく、まるでうぶな少年である。

ここでギャバンも麻暮の腕を掴み、

「ねえ、麻暮さん、聞いてください。

ぼくたちがもめていたのは、ぼくが純粋な気持で日本に残ると云っているのに、カトリーヌは不純な気持で日本に残ると云っているんです」

左右から腕を掴まれている麻暮は、

(郷田さんにモテ期がきちゃった)

と、変に微妙な気分でおもった。

変に微妙と云うのは、純粋と不純の差異がよく解らなかつたからだ。

「ギャバン君は純粋、カトちゃんは不純。

それって、どういう理由なの」

なにか云いたいカトリーヌを遮って、ギャバンは声高らかに云う。

「理由なんておおげさなことではなく、ふつうの常識なのです。

ぼくは、郷田さんの秘書をまっとうしたいから、日本に残りたいという、純粋な気持。

カトリーヌは、郷田さんとチョメチョメしたいから、日本に残りたいという、不純な気持」

「チョメチョメって、なんですか」

カトリーヌが麻暮に聞く。

「つまり、その、なんだな、簡単に云うと、セックスってことかな」

「それゴカイです。

ギャバンはひどい人です」

ギャバンは睨まれて、

「ぼくはセックスなんて言葉は使いません。

麻暮さん、翻訳をうまくやってください。

チョメチョメとは、つまり、その、いちやつきたい、というレベルで云ったつもりなんです」

「それもゴカイです。

わたしはただ、そばにいたいだけなんです」

「それはそうだろう。

ボクもそうおもうよ。

カトちゃんの性格は、なんとなく解ってきたから」

同意されて、カトリーヌは鉄仮面の頬にキスをした。

「おいおい、キスをする相手がちがうだろう。

郷田さん、いつまでも下向いてないで、なんとか云いなさいよ。

ケケッケケ」

麻暮は郷田の股間を、突っ突く真似をした。

「ぼ、ぼ、ぼ、ぼくとしては、ぼ、ぼ、ぼくとしては、ギャバン君も、カトリーヌちゃんも、日本に、残ってほしい」

郷田はようやく顔をあげ、なんとか云った。

「よし、決まった。

ふたりとも、このさい日本人になりなさい」

麻暮は立ち上がって大声で云った。

ふたりは、それぞれ表わし方はちがっても、心底喜んでいるのが、麻暮にはよく解った。

麻暮は例の思案の答が出やすい感じがした。

麻暮は少しずつ考えながら少しずつ話し始める。

「じつは、カトちゃんには、信じられないかもしれないが、郷田さんもカトちゃんが、好きなんだよ。

でも、若くはないし、もともと女嫌いだし、オカマ、いや元オカマだから、自分の気持ちを、カトちゃんには、伝えないで、帰国を、すすめようとしていたんだ。

ということは、郷田さんは、もう永遠に、カトちゃんには、会わないつもりだった、ということさ。

だから、カトちゃんの気持ちを知ったことは、ボクとしては、とてもとても喜ばしいことなのさ。

それで、提案なんだが、婚前旅行、じゃない、郷田さんと、日本中を観光してみないか。

観光って意味、解るよね。

ギャバン君も、観光したいだろうが、信用できるベビーシッターが見つかるまで、

しばらく麻子のお守をしてほしいのさ。

じつは、ボクはこれから、この郷田さんの屋敷を、改装したいのさ。

簡単に云うと、本宅をふたつに分けて、新婚さんゾーンを作りたいのさ。

ケケケ、ギャバン君もそうだろうが、ボクだって、お熱いおふたりさんに、あてられるのは、ご免だからね。

改装はボクひとりで、ざくっとやるけど、やかましいし危険でもあるから、その間は、ギャバン君と麻子は、書斎で生活してほしいんだ。

そういうことで、いかがかな」

云い終えて、麻暮はおおきく息を吐いた。

ギャバンが周りを見回す仕種をして、

「ぼくはそれでいいけど、たぶんカトリーヌもいいだろうけど、郷田さんはいいの」郷田は黙って、ひとつ首を縦に振った。

「それでは、善は急げって云うから、午後一メドに行動開始。

その前に、モーニング&ランチでミニパーティーをやろう。

ボクとギャバン君で、近くの酒屋に買い出しに行く。

シャンパンとワインとビール。

ぜんぶノンアルコールでね。

もちろん、キッチンには、郷田さんとカトちゃんに入ってもらおうよ」

カトリーヌが微笑み、郷田が頷いた。

麻暮がBMWの運転席に坐り、麻子を抱いたギャバンが助手席に坐ると、運転をする前に、麻暮はギャバンに電撃隊の来襲の件を伝えた。

ギャバンは一瞬驚きを見せたが、すぐに落ち着き、

「そうでしたか、なにかあるって感じはしたのです。

郷田さんとカトリーヌを、巻き込みたくなかったんですね」

「ギャバン君も、麻子もだよ」

「ぼくは、巻き込んでほしい。

ぼくが、撒いた種ですから」

「そうおもうかもしれないが、ギャバン君は被害者にすぎないのだよ。

電撃隊の狙いはボクひとりさ」

「でも、いざというときは、お手伝いさせてほしい」

「ありがたいが、ケケ、こういうとき日本では、気持だけ戴いておく、と云うんだよ」

二〇三一年、十月三十日、午後十時。

麻暮正作は、郷田邸を改装している。

業者に様々な資材を届けさせ、自ら工具を使って、素早く且つ堅実に休みなく仕

事を進めている。

「ふたつに分けて」

どころか、二十にも三十にも分けて、さながら迷路を作っている。

一段落すると、麻暮は書齋に顔をだした。

ギャバンがちいさい声で迎えた。

「ああ、麻暮さん、麻子ちゃんはついさっき眠ったところです」

「ありがとう、何か不便はないかね」

「さすがに郷田さんの書齋、便利すぎるくらいです。

ところで、郷田さんはいまどのあたりですか」

「そうさな、メールもしてないし、メールもくれないでと云ってあるから、たしか
なことは云えないけれど、いまごろは、伊勢志摩のホテルにチェックインしたとこ
ろじゃないかな」

「郷田さん、幸せ満開ですねえ」

「しばらくの間はね」

「それって、どういうことですか」

「絶世の美女と一緒にになって、苦労しない男はめったにいないからさ。

ボクらはプーシキンの悲劇を知っている」

「美人妻のナタリヤと密会したダンテスと決闘して、三十七歳の若さで死んだ、ロ
シアの天才文学者ですね」

「あらま、ボクより断然詳しいね。

荒野だって、蝶子には苦労させられている。

ギャバン君も、一緒になるなら普通の女性にきなさいよ」

「麻暮さんの奥さんだった、麗子さんみたいな、ですか」

「そうそう、彼女は普通のなかの普通だったね。

じつに短い期間だったが、長短は関係ない、最高の伴侶だったよ」

「了解しました。

ところで、迎え撃つ準備は進んでいますか」

「そうさな、あとは屋敷全体を耐火シートでくるむことかな。

家を燃やされたら、郷田さんに会わせる顔がないからねえ。

この書齋は鉄製だから問題ないが、戸締まりだけにはくれぐれも気をつけて」

「とにかくお疲れさまということで」

ギャバンは麻暮のために、温かい紅茶とマドレーヌをだした。

「おいおい、ボクにマドちゃんを思い出させる気かね」

「マドレーヌも、普通っぽい人だったけれど、きわめつけの才女ですからねえ」

「そうそう、あんな立派な看護師が近くにいたら、ボクも二百歳まで生きられるだ
ろうよ。

あるいは二百日で極楽浄土だろうよ」

「ゴクラクジョウドって」

「ケケケ、あの世行きってことさ。

しかも安楽死状態でね」
「ああ、アンラクシはいいですねえ。
ぼくもアンラクシ恋人がほしいなあ」
「ギャバン君はイケメンだから、いつでもできるよ」
「でもカトリーヌにふられちゃいましたよ。
ぼくはいけるとおもっていたんですが、郷田さんみたいに頭がよくないからなあ」
「頭なんかよくないくらいが丁度いいんだよ。
郷田さんを見ていると、ボクも頭がわるくてよかったとおもうくらいさ」
「ところで連中はいつやってきますか」
「ボクの勘では、明日早朝、まだ暗いうちに。
いまは嵐の前の静けさだね。
ボクは嵐が好きなふうに誤解されているが、本当は静けさが好きなんだよ」
「うまく云えないけど、がんばってください。
麻子ちゃんのためにも死なないでくださいね」
「あいよ、ギャバン君はいつも優しいねえ。
それじゃあ行くよ、ごちそうさま」
麻暮は出てゆき、ギャバンは麻暮に促されて二重ロックをした。

二〇三一年、十月三十一日、午前三時。

麻暮は迷路の一角で身構えている。
麻暮の予測通り、いや具体的には一時間早く、電撃隊は襲ってきた。
まるで忍者の風体で、忍者の術を使って襲ってきた。
(五十、いや百名はくだらないだろう)
「いやはや、いくらなんでも、こんなに多いとは」
愚痴っぽく呟きながら、まず最初の敵をカワカミジェットで倒した。
続いて二人目、三人目、四人目、五人目。
電撃隊は上下左右から襲いたいのだろうが、迷路を通過して襲ってくるので、麻暮としてはひとりひとり倒せばいい。
しかも迷路に迷って、攻撃体勢になっていない者ばかり。
これも麻暮の予測通りだった。
だが、予測していないことも起こった。
電撃隊が煙幕を張ったことである。
煙幕が迷路を埋めつくし、三センチ先も見えなくなった。
その煙幕を裂いて、数え切れない手裏剣が飛んでくる。
麻暮は床を這って、小刀で電撃隊の脚を一本ずつ斬って進む。
十分足らずで斬った脚は二十五本。

手裏剣の次は手榴弾である。

至近距離で投げってくるので、ミニ爆弾だが、麻暮は鉄仮面を吹き飛ばされた。
(連中め、この顔を見たら、恐怖で金縛りにあうだろう)

そうおもったが、タオルを三枚使って覆面をした。

麻暮が迷路を逃げ走ると、足音に向かって追ってきた電撃隊二十人ばかりが、片っ端から落とし穴に落ちた。

落とし穴のなかには毒蛇を十匹入れておいた。

電撃隊の次なる作戦は、強力吸引機を使うものだった。

風速百メートルかと感じられる勢いで、麻暮は吸い込まれそうになった。

かろうじて横穴に逃れると、吸い込まれるのは煙幕ばかりで、視界が良好になってきた。

強力吸引機の後ろにやはり二十人ばかりが屯しているのを窺うと、麻暮は上着を脱いでそれを自分の身代わりに吸い込ませた。

強力吸引機が止まった瞬間、麻暮は飛び出ると、カワカミジェットで全員を倒した。

(あと半数か)

その半数は、屋敷を取り巻いている。

麻暮は用意した電動ロープを使って屋根に上った。

まだ外は暗闇で、月も星も出ていない。

雨が降り出しそうだったが、それまでに片付けたかった。

屋根に据え付けておいた最新連発銃を発射して、三十人ばかりを倒した。

電撃小僧の指令がとんで、数十人が縄梯子で屋根に上ってくる。

それらはひとりひとり、カワカミジェットと小刀で倒した。

もうおしまいだろと見おろすと、電撃小僧の周りにすくなくとも五十人はいる。

(分身の術でも使うのか)

麻暮は屋根の陰に身を隠し、呼吸を整えた。

だが、荒い息はなかなか収まらず、気づくと手にも足にも胴にも、浅くはない傷が幾つもある。

ひとつひとつ手当てをする暇もないので、血止めの丸薬を服んだ。

電撃小僧が空に向かって云いはなつ。

「さすがに面倒な相手よ。

小手先芸で倒すつもりだったが、さらば、いたしかたない。

あまり大袈裟なことは嫌いだが、ミサイルを使わせてもらう」

放火の対策はやったが、崩壊の対策はやっていない。

麻暮は屋敷から逃れ、鵜沼海岸で最後の戦いをする決心をした。

屋根を降り、海岸に向かって闇の中を走ると、案の定屋敷には眼もくれず、大勢の電撃隊が追ってきた。

ヘリコプターの音が聴こえたので、これ以上の電撃隊がきたのかとおもわれた。

(やれやれ。

海岸におびきよせたはいいが、こんどは海中におびきよせなければならないな)
しかし、ヘリコプターは味方だった。

(おう、川上君か)

次第に下降するなり、ロープを垂らした。

麻暮がロープを掴むと、ヘリコプターは上昇し、殺人光線を地上に浴びせた。

電撃小僧はすかさずミサイルを発射したが、ヘリコプターをおおきくはずれ、空しく海面で爆発した。

生き残った電撃小僧と子分数名は、どこへともなく退散した。

ヘリコプター機内に入った麻暮が、

「いったいどうして」

とまず聞くと、操縦する川上は、

「簡単に云いますと、伊勢志摩にいる郷田さんから連絡が入り、麻暮さんのGPSをチェックしてほしい、何か動きに異常があったら、麻暮さんの応援に向かってほしいと。」

郷田さんは、さすがに名探偵ですね、麻暮さんが自分たちを湘南から去らせた理由が、他にあるんじゃないかとずっと考えていたようなんです」

「郷田さんらしいが、おかげで助かった」

麻暮は素直に云うと、急な睡魔に襲われた。

ヘリコプターは湘南緊急外科へと向かった。

二〇三一年、十一月三日、午後三時。

麻暮は湘南緊急外科の入院病棟のベッドにいる。

三日ぶりによく薄目を開けると、ベッド脇に郷田がいて、麻暮の手を握っていた。

ベッドの足元には、カトリーヌと麻子を抱いたギャバンがいる。

「ああ、よく寝た。」

このベッドは寝心地がいいから、少々寝過ぎたかな」

「麻暮さんの生還だ、バンザイ、バンザイ」

郷田は涙声で云った。

ギャバンとカトリーヌが歓声をあげると、その声を聞きつけて看護師が入ってきた。

「ケケケ、マドちゃんに似た看護師さんだね。」

それともボクが目玉が狂っているのかな」

「バカねえ、ダーリン」

マドレーヌに似た看護師ではなく、マドレーヌ看護師だった。

「あれれ、ここはパリかい」

カトリーヌが麻暮の疑問に応える。
「ねえさんに、マグレさんのことをしらせると、すぐにパリからやってきたのよ」
(また会えるなんて)
麻暮が絶句すると、カトリーヌは、
「理事長の許可をもらって来ているの。
ダーリンが退院するまで、私設看護師よ」
「それはありがたいが。
郷田さん、ボクの顔はいま、どんなマスクになっているのかな」
あえて麻暮は淡々と云った。
「予備の鉄仮面でもよかったが、見つからなかったので、リノのマスクをかぶせましたよ」
「それはありがたいが。
郷田さんの家を荒らして申し訳ない」
郷田はおもわず苦笑して、
「まあ、派手にやってくれましたね。
警察に立ち合ってもらって、遺体はぜんぶ片付けた。
と云うのは、警察のホームページの方へは、すでに電撃小僧からコメントが入っていて、ぼくも見せてもらったが、他人の家を借りて訓練をやった云々との内容でした。
奴も面子があるのだろう、麻暮さんの名前はひとつも出していない。
ギャバン君とカトリーヌに手伝ってもらって、なんとか住めるようにはしておいたから、早く戻ってきてください」
麻暮がそれに応えなかったのは、
(もう郷田邸にはいられない)
とおもっていたからだ。
電撃小僧は体制を建て直して、ふたたび攻めてくるはずだからだ。
麻暮はギャバンに対して、
「カトちゃんがいれば、郷田さんに秘書は要らないだろう。
どうかね、これからはボクの秘書になるというのは。
もちろん、ベビーシッターを雇うか保育園に頼むかするので、麻子のお守を頼むわけではないよ」
「郷田さんさえOKなら、ぼくはやりたいです」
ギャバンは麻暮が倒した、厩大な数の電撃隊の亡骸を眼にしている。
郷田のそばにいるよりも、麻暮のそばにいた方が、昂奮するにちがいないと、さっきから考えていたのだ。
それに、郷田とカトリーヌの近くにいることは、何となく居心地がわるそうな気がしていた。
「ぼくに決める権利はないよ。
ギャバン君はいつだって自由なんだから」

郷田がそう云うと、麻暮は、
「決まったな。
それじゃあ、明日退院、明日パリ行きだ。
マドちゃん、いろいろ準備を頼むね」
マドレーヌは、戸惑い二割、感激八割の表情、ギャバンは、戸惑い二割、昂奮八割の表情になった。
郷田がじつに微妙な表情をしたのは、これは自分たちに危害を及ぼさせないための、麻暮の忖度だと推察したからだった。

第四部／第二章

もし神が現代に生きていた
きっと無神論者になっていたとおもう
ヴォネガット

人間は自分を悪魔にも神にもできる
ヘンリー・ミラー

二〇三一年、十一月四日、午後七時。

麻子を背負った麻暮正作とギャバンとマドレーヌは、成田空港のロビーで搭乗時間がくるのを待っている。

二十時二十分発 JAL パリ行きである。

郷田狂介とカトリーヌはさっきまでここにいた。

「ぎりぎりになったら、泣き出しそうだから、このあたりで戻るね」

と郷田が云ったのだった。

「ボクも泣くから、それこそ愁嘆場だ。

もうけっこう毛だらけだよ」

麻暮は郷田と握手をした。

「麻暮さん、落ち着いたたら、いや片付いたら、すぐに一旦帰ってきてね。

そのとき鵜沼教会で結婚式をあげるから」

「おや、郷田さんはクリスチャンだったっけ」

「ぼくもカトリーヌも、無宗教。

でもカトリーヌは、教会で結婚式をあげるのが夢だったらしい」

「万事了解。

では落ち着いたら、いや片付いたら連絡するよ」

「まっています」

カトリーヌが微笑んだ。

(ううむ、こういうのを百万ドルの微笑って云うんだな)

カトリーヌがマドレーヌと、郷田がギャバンとハグするのを眺めながら、
(帰らねばならない)

と麻暮はおもった。

(ボクが帰らないと、郷田さんのことだから、結婚式をあげることはないだろう。
となると、カトリーヌは悲しむだろう)

郷田とカトリーヌが去っていくと、いつまでも手を振っているマドレーヌをよそに、ギャバンが麻暮に向かってつぶやく。

「ジャン・ギャバンとリノ・ヴァンチュラの共演ですから、マドレーヌさんはジョアンナ・シムカムですね」

「それは『冒険者たち』だろ。

あれはギャバンではなく、アラン・ドロン。

だからそれを云うなら、『現金(げんなま)に手を出すな』さ。

となると、女優はジャンヌ・モロー」

「あらら、麻暮さんは詳しいですね」

「ボクらの世代は、みんな詳しいのさ。

ギャバンで育ち、ドロンで大人になり、ミシェル・ピコリで年を取った。

ヴァンチュラは、その間、斜め後ろに存た」

「そう云えば、麻暮さんのマスク、変わりましたね」

「ケケケ、いまごろ気づいたのかい。

ギャバン君は、手塚治虫を知っているかい」

「漫画やアニメファンで、知らないフランス人はいませんよ。

『鉄腕アトム』『リボンの騎士』『火の鳥』『ブラック・ジャック』『ブッダ』、漫画の神様」

「その手塚さんがね、どういうわけかヴァンチュラの大ファン。手塚漫画に登場する〈丸首のブーン〉と云うキャラクターは、ヴァンチュラがモデルなのさ」

「と云うと、そのマスクは、丸首のブーンですか」

「ギャバン君は、ブーンと云うよりビーンと云いたいのだろう」

「いいえ、ドーンです」

ふたりは顔を見合わせて笑った。

マドレーヌが不思議そうな表情で視た。

二〇三一年、十一月七日、午前八時。

麻暮とギャバンはマドレーヌの部屋に居る。

麻子をベビーセンターに預け、マドレーヌは早朝にMC病院に出勤した。

麻暮とギャバンは、マドレーヌが作っておいてくれたサンドイッチを食べながら、ミーティングをしている。

「鼠小僧、じゃなかった、電撃小僧はなかなか攻撃してきませんね」

ギャバンは首をかしげながら云った。

「このマンションは、セキュリティが完璧だからね。」

連中はすでにパリに入っていて、様子窺いだとおもうよ」

麻暮は淡々と云った。

「それなら麻子ちゃんは大丈夫でしょうか。」

人質をとるのは、連中の常套手段ですからね」

「ボクも初めはそうおもったんだがね。」

麻子を人質にとるなら、日本でもそのチャンスはあったわけさ。

荒野と蝶子には、麻子と同じ頃に生まれた太郎君がいる。

さすがに赤ちゃんには、手を出せない気分なんだろうよ」

「そうなると、麻暮さんをおびきだすには」

「そう、マドちゃんか、ギャバン君か。」

ギャバン君はいつもボクと一緒にだから、やっぱりマドちゃんが危ないな」

麻暮はそれでも淡々と云った。

「麻暮さんのことだから、何か対策は考えているんでしょうね」

「いろいろあるし、マドちゃんにも話したんだが、マドちゃんが云うことには、人質になったってかまわない、ダーリンがすぐに助けてくれるから、だとさ」

「愛ですね、愛」

ギャバンは大袈裟な声を出した。

「ケケッ、ボクは愛なんてものを信じていないよ。」

男女がむすばれるのは、愛なんてものではなく、本能的に魅かれあうんだよ。

尤もボクにはすでに本能も薄れてきているから、錯覚だね、錯覚」

麻暮は終いの語彙に力をこめた。

「はあ、錯覚で男女はむすばれる、ですか。」

「ぼくにも、錯覚してくれる女性が登場しないかなあ」

「それはそう難しいことではないね。」

ボクの構想なんだが、日本で探偵事務所を開いてみないか」

やはり麻暮は淡々と云った。

「意味が解りませんが」

「ギャバン君が、作家に転身した郷田さんの代わりに、探偵として独立するって話さ。」

資金はボクが出すし、当初だけはボクが補佐する。

郷田さんも喜んでくれるだろうし、お得意さんを紹介してもくれるだろう」
昨日蝶子の名で、五千万円が振込まれていた。

その金をそっくり、ギャバンの口座に移す手続きは了えていた。

「ええっ、ええっ、それホントですか」

ギャバンは文字通り飛び上がった。

「ケケケ、ボクはいつも冗談は云うけど、嘘はたまにしかつかないよ」

「どうしてぼくなんかのために、麻暮さんはそこまで」

「理由は三つある。

まずはギャバン君が郷田さんにとって、大切な人間だからさ。

それとギャバン君を見ていて、探偵の資質があると睨んでいるのさ。

もうひとつは、じつはボクには、金助、玄治と云う有能な片腕がいたのに、独立させる甲斐性もなく、ボクよりも先に死なせてしまった」

麻暮は珍しくしみじみと云った。

ギャバンは頬を紅潮させていた。

二〇三一年、十一月七日、午前十時。

麻暮とギャバンはセーヌ川沿いを歩いている。

パリの春の匂いはセーヌの匂いといわれているが、晩秋のセーヌの匂いはパリの匂いである。

マドレーヌを人質にとられる前に、自分たちの姿を衆目に曝すことによって、電撃隊をおびきよせようとふたりで決めたのだった。

むろん明るいうちはやってこないだろうと麻暮もおもってはいたが、自分たちがマンションにこもってばかりいるわけではないことを見せたかった。

無言で一時間ばかり歩いたところで、麻暮は口を開く。

「さて、ギャバン君」

「はい、麻暮さん」

「夜まで待つか、それとも河岸を代えるか」

「待つのが辛いのか、待たせるのが辛いのか」

「うむ」

「郷田さんは、待たせるのが辛い性格ですが、麻暮さんは待つのが辛い性格」

「その通り」

「なら、ブローニュの森だったら、昼間でも相当に暗いところがあります。

もちろんそこは人通りもないし、車もくることはありません」

「そこだ」

「はい」

「準備は万端だ」

「はい」

「タクシーで行くか、歩いて行くか」

「これからのことを考えると、タクシーで近くまで行きましょう」

「いい判断だ」

すぐにタクシーを拾い、ブローニュの森へ向かった。

運転手がバックミラーを見ながら、フランス語で声をかける。

「お客さん、ハロウィンはもう終わったはずじゃないですかい」

麻暮に代わって、ギャバンが応える。

「日本ではひと足遅れだから、いまがハロウィンの季節なんですよ」

「むかしならいざ知らず、SNSの世の中で、ひと足遅れですかい」

「もともと日本人にとっては、ハロウィンなんて関係ないんですよ。」

神様に感謝捧げるより、親に孝行ですから」

「いやあ、なかなかけっこうな国じゃありませんか。」

こうテロばかり続くと、神様も糞もありませんや」

「糞はあるでしょう、糞は関係あるでしょう」

「私はクリスチャンですがね、神様は何もしてくれないから、いいかげん足を洗おうかと」

「タクシードライバーやめるんですか、それともクリスチャンやめるんですか」

「どちらもやめにくいから、人間から足を洗おうかと。」

ブローニュの森には、自殺に最適な場所があるんでね」

ここで麻暮がフランス語で口をはさむ。

「ボクらもそこへ行くんだぜ。」

あんたもいっしょにどうかね」

「げっ、ご勘弁を、あっしには可愛い妻子がいるんで」

「それなら、自殺なんて軽々しく口走ってはいかん。」

それに、神ってのは何もしてくれないから尊いのさ。

もともと神なんて、便所の紙にもならん

神が何かをしてくれるなら、人間は何もしなくていいからね」

「はあ、怖れ入りやした」

タクシーが目的地にとまって、麻暮は、運転手に小切手を渡した。

それは、運転手の目玉がひっくり返るほどの額であった。

麻暮とギャバンは降りた。

それから三十分ばかり歩いた。

二〇三一年、十一月七日、正午。

麻暮とギャバンはブローニュの森の奥にいる。
太陽は美しく輝いているはずであったが、此処は日の名残りすらもなかった。
「おいおい、暗すぎやしないかい」
さすがに麻暮は呆れて、足もおぼつかないのでライトをだした。
「ケケ、これくらいでないと、連中も襲いにくいだろうよ」
ギャバンは麻暮の口調を真似て平然と云った。
「ケケ、ギャバン君は探偵らしくなってきたな。
立派、立派」
(だがこんな場所で、百人の電撃隊に襲われたら、防ぎようもないな)
「そうだ、ギャバン君、駆けっこは得意かな」
「走るのはいけるのより得意です」
「そうか、それならひとつ走り行って、十メートルほどのロープを十本ばかり買ってきてくれないか」
「ロープですか」
ギャバンが不思議そうにするので、
「連中は忍者だよ。
この暗い空中を飛ぶ。
それならこっちも、あちこちの樹木にロープを付けて、空中戦さ」
「まるでサーカスですね。
ぼくはサーカスのブランコ乗りになりたかったんです」
「それは頼もしい。
ともかく、連中が襲ってくる前に、最善の準備をしよう」
「はい」
ギャバンはすぐに走り去った。

二〇三一年、十一月七日、午後一時。

ギャバンはタクシーに乗って、長いロープを売っている店を探し廻っている。
すでに三軒行ったが、短いロープしかない。
ふとギャバンは、
(もしかすると)
とおもった。
(もしかすると、麻暮さんは、僕を争いに巻き込むたくないために、森から遠ざけたのではないか)
そうおもうと、いつまでもロープを捜し回っていることが滑稽におもわれてきた。
そのとき、続けざまに凄まじい爆発音が聴こえた。
ブローニュの森の奥だ。

(しまった)

ギャバンはタクシーの運転手に叫ぶ。

「森に向けて、全速力で」

爆発音はまた二度三度と聴こえた。

タクシーの窓を開けて眺めると、森から火柱があがっている。

また数度の爆発音があったが、ギャバンには聴こえていない。

もはや頭のなかは、文字通り真っ白なのである。

ギャバンが現場に着いたときは、すでに多くのパトカーが来ていて、附近をライトで照らし、セリーヌ警部があれこれ指図をしていた。

血の臭いが充満している。

爆煙は雲散霧消していたが、厭な臭いを残していた。

遺体処理はすでに進んでいたけれども、ギャバンの眼に映るかぎり、手足が満足に付いている遺体はなかった。

おもわずギャバンが声をあげると、セリーヌは近づいてきて、

「これは一体なんだとおもう」

と日本語で聞いた。

ギャバンが黙っていると、

「死体が百以上もある。

集団自爆かね」

「自爆テロという意味ですか」

ギャバンの頭のなかは、もう真っ白ではなかった。

「いや、犠牲者が見当たらない」

(麻暮さんの遺体が見当たらないということだ)

ギャバンはすこしだけ元気になって、

「それなら集団自殺ですね」

「そうかもしれない、そうでないかもしれない。

何か時代錯誤って感じもするが、どうしたわけか遺体はみんな忍者だよ。

だいたい忍者が自殺なんかするかね」

「それは、するときはするでしょう」

ギャバンは適当に応えた。

「もしかして、もしかしてだけど、だれかがこれだけの人数を倒すとしたら、麻暮さんくらいしかいないとおもうんだけど。

君は正直どう思うかね」

セリーヌは上目遣いでギャバンを視た。

「そうかもしれない、そうでないかもしれない。

何しろ僕は、見ていません。

警部だって見ていないでしょう。

麻暮さんの遺体はなさそうですし」

「まあね」

「目撃者がいないんだから、しかたありませんよね」

フランス語は日本語とちがって「アルゴ」(隠語)が幾通りもある。

本来卑しい言葉である日常言語、俗語、卑語、違犯的な言葉、衝撃的な言葉を織りまぜて、絶望のなかの優しさとユーモアに満ちた、ピカレスクの趣きがある言葉である、と云われる。

セリーヌは、そのアルゴを連発させる。

(尤も翻訳をしまえば、他愛もない言葉なのではあるが)

「くそったれめ。」

最初からしかたないとおもってはいたよ。

もしも麻暮さんがやったとしても、そうならまちがいなく正当防衛だからね。

それに傀儡野郎の君がいろいろ知っていたにしても、どうせ生き神様麻暮さんのマイナスになることは云わないだろうからね。

それにしても、シロアリ駆除みてえに、防衛しすぎたもんだな。

わたしも麻暮さんの敵畜生でなくてよかったぜ。

やれやれ、麻暮さんはパリにとって、ウンコほどの味方でもないね。

このままだと、パリをわたしの下手な歌みたいに、ボロボロにされてしまう。

念のため傀儡君には伝えておくがね、いくら正当防衛でも、いくら理屈が通っていても、麻暮さんは憎むべき大量殺戮者だよ。

まるで死と遊んでいるような人間を、決して英雄視なんかしてはいけないぜ」

セリーヌの口調は説教臭く、愚痴っぽかった。

(それにしても麻暮さんはどこへ行ったのだろう)

おもいながらギャバンは、取り急ぎマドレーヌにメールを入れた。

マドレーヌからの返信は、仕事が一段落したらすぐにそちらへ向かうというものであったが、こっちへ来ても意味がないから、マンションで報告するし、これからの相談もしようと、ギャバンは伝えた。

二〇三一年、十一月七日、午後五時。

ギャバンはマドレーヌの部屋に居る。

さっきからの話題は麻暮のことである。

ふたりはフランス語でやりとりをしている。

なかなか答らしきものが出ないのは、麻暮から何の連絡もないからである。

連絡がないのは、ふたつ理由が考えられると、ギャバンはマドレーヌに説明する。

麻暮さんが電撃小僧に捕まってしまったか、麻暮さんが殺されたふりをしているか。

「でも、麻暮さんは電撃小僧なんかには捕まるような人ではないから、殺されたふりをしているとしか考えられません。

麻暮さん自身のためではなく、僕たちのために。

沢山の遺体のなかに、麻暮さんの遺体は絶対になかったから、殺されてしまったということはありません。

ただし、凄まじい現場でしたから、まったく無傷でいることも難しいでしょう」

ギャバンの説明にマドレーヌは、

「それならダーリンは、いまどこかの病院にいるのでしょうか」

「病院に行くなら、マドレーヌさんのいるMC病院へ行くでしょう。

僕の見るところ、麻暮さんは忍者よりも忍者ですから、自分の傷は自分で治すことができるでしょう。

と云うことは、傷が癒えたらマドレーヌさんの前に姿を現わすにちがひありません」

ギャバンはわざと自信満々で云った。

「それでは、わたしは待つしかありませんね」

ずっと悲し気な表情だったマドレーヌが、決然として云った。

「はい、待っていてください。

必ず麻暮さんはあなたの前に復活します」

ギャバンはひといきいれてから、

「僕は、日本で待ちます。

郷田さんに詳細を報告しなければなりませんし、麻子ちゃんも預けっぱなしというわけにもいきません」

「そうですか、それならお互い、これからも連絡を密にするということで、お願いします」

「もちろん、麻暮さんが日本で復活するということもあるかもしれませんが、逐一情報交換はいたしましょう」

ふたりはどちらからともなく、かたい握手をした。

第四部／第三章

人類の一体性とは
だれもどこにも逃れられぬことを意味するのである
クンデラ

苦しみや悩みは
ある種の快樂となると云ってよい
セネカ

二〇三一年、十二月二十一日、午前八時。

郷田狂介と内縁の妻カトリーヌ、そしてギャバンと麻子は、郷田邸で朝食をすませたばかりである。

外は昨夜からの小雪。

湘南の初雪である。

郷田はさっきからガラス窓の向こうを眺めている。

(あの雪のなかから麻暮さんがやってくる)

そんな気がしてならないのだ。

ギャバンは麻子をあやしながら、

「麻暮さんはきっと戻ってきます」

自分に云いきかせていた。

麻子は父親の不在を解っているのか、いつも元気がない。

ギャバンは来年早々に此処を出る。

鎌倉で探偵事務所を開く予定になっているのだ。

郷田はカトリーヌと正式に結婚をして、麻子を養女として引き取る気になっている。

麻子に普通の女の子になってほしい。

しかしそれでも麻暮の了承がほしい。

雪のなかをやってこなくても、一本のメールがあるのではないかと感じている。

(麻暮さんは不滅だ)

だがメールはカトリーヌのスマホにきた。

「麻暮さんかい」

とっさの郷田の問いに、カトリーヌは首を振った。

「マドレーヌねえさんが、シンパイして、またメールをくれたの」

「そうか」

嘘だとおもったがそう応えた。

カトリーヌは見るからにそわそわしはじめた。

そして、

「ちょっと、でかけてくるわ」

と云った。

「雪がやんでからにしたら」

と郷田は云ったが、カトリーヌは支度をやめなかった。

「でかけると、イチドきめたら、でかけないと、きがすまないのよ」

「それは解るが、午後には雪もやむ。」

それにぼくの車は、まだスノータイヤに代えていない」

「エノデンにのりたいの」

「江ノ電だって動いているかどうか」

「だいじょうぶ、スマホでしらべたわ」

「そうか」

何を云っても無駄だと覚った郷田は、ギャバンに目配せをした。

カトリーヌは云って、でかけた。

すぐにギャバンは、カトリーヌの尾行のために、でかけた。

麻子と残された郷田は、ギャバンから聞かされた麻暮の言葉を思い起こしていた。

『絶世の美女と一緒にになって、苦労しない男はめったにいない』

郷田は深い溜息をついた。

二〇三一年、十二月二十一日、午前九時半。

郷田は書斎でパソコンに向かっている。

その足元で麻子は静かに眠っている。

郷田の指は動いてはいない。

『それからの死んだる団 (仮題)』は、(四百枚原稿用紙換算) 百枚で止まっている。

本でも読もうかと書棚を眺めたときに、ギャバンからメールがきた。

【驚きました江ノ電を行ったり来たり尾行に気づいたのかと思いましたが江ノ島駅に迎えの車が来て運転していたのは蝶子さんでした何か信じられないものを見た気持です行き先は西園寺邸でしょうからさらに尾行を続けます】

郷田は返信する元気もなかったが、何とか【気をつけて】とだけ送った。

二〇三一年、十二月二十一日、正午。

葉山の西園寺邸の天井裏にギャバンはいる。

麻暮が忍び込んだ方法で、屋上から忍び込んだのである。

そして屋根裏で部屋で行なわれている、有り得べき有様を覗き見ることになる。

望むと望まざるに関わらず、覗き見ることになったのである。

そしてギャバンは後に記す『ギャバン探偵ノート (日本語版)』に、覗き見た様

子を簡潔に残すことになるのである。

*

【ミュレの『フランス史』のルイ十四世の項目にこうある。「恋愛と色事、出産と墮胎でよく知られた館があった。その館を構えている婦人たちは、どんな要求にも応えてくれ、自然のなりゆきによって彼女たちの最初の生業である墮胎を幼児殺しへ、さらには重要な人物の殺人へと広げてしまっていた。不快な夫、目障りなライバル、それから出世の競争相手、宮廷の敵たちは姿を消し続けた」逮捕された女占い師（墮胎、毒殺、黒ミサの専門家）のなかで、最も有名で組織の中心にいたのはカトリーヌ・デエだった。このときのカトリーヌ・カピタの有様を望見したとき、この忌わしきカトリーヌ・デエを想起せざるを得なかった。屋根裏部屋の四隅には、何十何百という蠟燭の灯火が煌めき、怪しい輝きのなかで、カトリーヌも蝶子も丸裸である。お互いの白い肌には無数の鞭の痕があり、フレンチキスの合間に、その傷を嘗めあっている。その表情は苦痛のかけらもなく喜悅そのもの、ときおり表情以上の喜悅の声音が、喜悅の極みの音楽が、喉の奥の奥から零れる。床にはココインとおぼしき白い粉が散乱している。そのうちカトリーヌが、のけぞるように仰向けに寝ると、蝶子はカトリーヌの露な臍の周りに蠟を垂らし、強く唇を噛んで、血液と唾液を垂らす。蝶子の口から漏れるのは、血液と唾液のみならず、祈りの、いや呪いの言葉である。悪魔祓いの儀式を借りた、悪魔招きか。何を云っているのかは不明だが、誰かを（荒野氏の永遠のライバルである麻暮氏を）呪い殺そうとしている風におもわれる。その間ふたりとも瞑目していて、眼の動きが解らないために何を念っているのかも解らない。何も念っていないのかもしれないが。くすんだ血の臭い、粘着的な蠟燭の臭い、生々しい女体の臭い、焼け焦げた皮膚の臭い、暗鬱な煙の臭い。その後も毒々しく血塗られた、禍々しい儀式は続いたが、そのうち屋根裏部屋全体に、厳かではあっても、慄然とする無気味な笑い声、笑い声と云うよりも唸り声、絞り出す悪魔の音が響き渡り、（あれはきっと荒野氏のものである）ふたりは薄く眼を開け、お互い運命的な恋人同志を見つめあう様子で、長く見つめあうのである】

*

ギャバンは郷田に、この件を一切伝えなかった。

伝えられなかった。

カトリーヌが蝶子の車に、自ら乗り込んだと云う事実だけで、郷田の憔悴はしばし鎮めようもなかったのである。

二〇三一年、十二月二十四日、午後八時。

郷田とギャバンと麻子は、郷田邸の応接間で寛いでいる。
郷田とギャバンはワインで乾杯をした。
クリスマス・イブである。
麻子は、いくつかの小さなクリスマス・ツリーと戯れている。
ワインに口をつけずに、郷田は溜息をついた。
ギャバンは、目撃したことを云えない。
郷田には一生、云うつもりはない。

「メリー・クリスマス」

ギャバンが云った。

「ギャバン君、来年早々の探偵事務所開設おめでとう」

郷田が云った。

「これもみんな、郷田先生と麻暮先生のおかげです」

「麻暮さんが知ったら、とても喜ぶだろう」

「ともかく未だ行方不明と云うのは、謎ですね。」

マドレーヌさんから、具体的な情報は送られてきていません」

「謎と云えば、カトリーヌも謎だねえ。」

いまごろどうなっているのやら」

「きっと元気ですよ」

「元気ねえ、問題はどうか元気かだな」

「元気なら、どうかこうとかないでしょう」

「それはそうだが、元気ならどうにでもなるか」

「そうですね、元気ならやりなおしもききます」

「やりなおしだけは、もう無理だろう。」

ぼくたちはもともと、なんかの拍子で結ばれたにすぎない」

「無理なんてことは、この世にありませんよ。」

それに、結ばれる男女はみんな、なんかの拍子でしょう」

「そうかな」

「はい」

「そうかなあ」

「はい」

「ほんとうにそうかなあ」

「はい」

「ギャバン君は若いからそう云える。」

若くなくなると、あれもこれも無理になる」

「郷田先生はまだ若いです」

「そら麻暮さんよりは若いけどさ」

「マドレーヌさんには、カトリーヌさんは元気ですと伝えてあります」
「そう云うしかないねえ」
「はい」
「郷田さんも僕も、麻子ちゃんも元気です、と伝えてあります」
「それはそうだ、嘘ではない」
「ホントでもないでしょうが、そう云うしかありません」
「そう云うしかないねえ」
「はい」
「せつないねえ」
「はい」
「どうすればいいかなあ」
「郷田先生は原稿を書いてください。
麻暮先生もカトリーヌさんも、僕の探偵事務所で請負います」
「依頼人はぼくだね。
それなら依頼料を払うよ」
「麻暮先生からすでに充分戴いています」
「それはそれ、これはこれ。
ならば、麻暮さんの探索は麻暮さんの費用、カトリーヌの探索はぼくの費用で」
「作家は、お金のことなんか考えないほうがいいですよ」
「それは、ギャバン君の考えかね」
「ええと、森鷗外、じゃなかった、夏目漱石」
「漱石が云ったのは、本を売るなんて卑しい行為だと」
「それも、同じ意味ですよ」
「同じではないが、近い」
「鵜沼と鎌倉も近いです。
ときどきお伺いしますね」
「ギャバン君は優しいね。
探偵は優しいだけじゃ駄目だよ」
「はい」
「麻子ちゃんは、ぼくが見るから心配要らない」
「いえ、僕が見ます。
そうでなければ、麻暮先生に恩が返せません」
「赤ちゃんは、探偵には邪魔だよ。
しかし、作家には癒しになる」
「そうですか」
「そうだよ」
「そういうものですか」
「そういうものだよ」
「郷田先生はすっかり男らしくなりましたね」

「逆カミングアウトしたけど、またカミングアウトしたい気分だよ」

「解ります、解ります。」

僕は間違えました。

郷田先生は以前から男らしかったのです」

「男らしいとか女らしいとかなんて。

人間らしくありたいだけさ。

麻暮さんに会いたいなあ、こんなときだから、余計に会いたいなあ」

「解ります、解ります。」

麻暮先生は、懐かしい人です」

「麻暮さんは、いまのぼくをなんて云うかなあ。

恋情よりも友情さって云うかなあ。

女よりも文学さって云うかなあ」

「云いそうですが、云わないでしょう。

麻暮先生は郷田先生を完全に信頼していましたから、郷田先生の云うことを聞きながら、そうかそうか、そうだそうだと頷くだけでしょう」

「そうか」

「そうです」

「そうだよねえ」

「ところで郷田先生は、カトリーヌさんがどうなればいいとお考えですか」

「うむ、ぼくのところに戻ってほしいが、それは簡単ではないだろう。

すくなくともパリに、姉さんのところに帰してあげたいね」

「解りました。」

ギャバン探偵事務所としては、その線で尽力します。

期限は一ヶ月、それまでに対応します。

そして、麻暮先生については」

「それはもちろん、日本に、ぼくの家に戻ってもらって、麻子ちゃんと親子水入らずと云うか。

麻子ちゃんだって赤ちゃんなりに、パパの匂いとか感触とか声の響きとか、ちゃんと解っているはずだよ。

ぼくやギャバン君が抱っこするのと、麻暮さんが抱っこするのではどこがちがうんだよね」

「解りました。」

ギャバン探偵事務所としては、その線で尽力します。

期限は一ヶ月、それまでに対応します。

すでにセリーヌ警部にもよく頼んであって、警部からも発見は時間の問題だってメールももらっています」

「でもさ、遺体で発見なんて、駄目だよ。

五体満足、元気で発見でなけりゃ」

「それは前提条件です」

「前提」

「条件です」

「難しい言葉を知ってるね」

「難しい言葉も勉強して、難しい事件も解決する、そんな探偵事務所でありたいです。

目標はもちろん、郷田狂介探偵事務所です。

麻暮先生は、探偵事務所を持たない探偵ですが、僕はおかげさまで探偵事務所を持てました」

「麻暮さんだって、むかしは探偵事務所を持っていたんだよ」

「おやまあ、ホントですか」

「ホント、ホント。」

半世紀以上前に起こった、極め付けの難事件を解決したのは、ぜんぶ麻暮さんなんだよ。

セリーヌ警部には、大量殺戮者なんて云われたらしいけど、だれも殺さずだれも傷つけず解決させたんだ」

「セリーヌ警部はどうしてあれほどひどいセリフを云うんでしょうね」

「羨ましいのさ。」

とても真似はできないからね」

「では、いつから」

「いつからって」

「ですから、いつから」

「いつから、いつから、ああ、殺戮者につてか」

「はい」

「それは、ぼくの知るかぎり、荒野大人の暗躍からだろう」

「やはり」

「やはりかどうか、荒野大人は麻暮さんにとって義弟だからね。

ほうっておくわけにもいかなかったんだね」

「僕は麻暮先生を尊敬していますが、麻暮先生の真似はどうもできません」

「それでいいのさ」

「僕は、尊敬する郷田先生の真似をしていきます」

「それは、やめたほうがいい」

「やめたほうが」

「いい」

「なぜですか」

「なぜって、ギャバン君には、死ぬまで探偵をやってほしい。

ぼくみたいに、作家転身なんて心境に、なってほしくないね」

「なら、僕はどなたを目標にしていけばいいのでしょうか」

「フランスには、メグレさんがいるじゃないか」

「メグレさんは小説のなかの人物です。」

しかも探偵ではありません。
セリーヌ警部が尊敬する人です」
「そう云われればそうか」
「日本人の探偵を目標に、僕はがんばりたいのです」
「がんばりすぎると、ぼくみたいになるから、ほどほどにがんばってもらおうとして、
それでは、明智小五郎とか、金田一耕助とか」
「やっぱり、小説のなかの人物じゃありませんか」
「ぼくも麻暮さんもそうだが、まあいいか。
それなら、六本木に、かつてのぼくの盟友で、木葉完蔵と云う探偵がいる」
「聞いたことがありません」
「奥ゆかしい人だからね。
でも、平成の時代には、『世界探偵コンクール』で、十年連続チャンピオンと云
う、前人未到の記録保持者なんだよ」
「ぜんにん、きとう」
「さすがのギャバン君も、前人未到は解らないようだね」
「要するに、いまだかつてだれもやったことがない」
「なんだ、解っているのかい」
「前後の言葉で」
「そうさ、人間の言葉には前も後ろもある。
人間のやることには、表も裏もある。
それだけを念頭に置いてやれば、目標の探偵なんか要らないよ」
「きとう」
「念頭」
「ねんど」
「ね、ん、と、う。
まあ、さっき云った、前提条件みたいなものさ」
「はい、それを、肝に命じて、頭に念じて」
「まあ、そういうことだよ」
「世界一の探偵は、麻暮先生かと」
「たとえばさ、オリンピックに、射撃種目があるだろ。
あれで金メダルとった選手より、山奥の猟師のほうが腕は数段上かもしれない。
まあ、上には上があるってことで、木葉は凄いが、麻暮さんは数段上だから、宇
宙一の探偵だよ。
もしかすると、いまごろは、宇宙ロケットでお月さまかもしれないなあ」
「お月さまの住人も、麻暮先生によって、大量殺戮されて、いまは兔一匹もいない
かもしれませんね」
「がんばるのもほどほど、冗談もほどほどにね」
「はい」

第四部／第四章

動物界の歴史では
啞然とするような変態が相次ぐだけ
バタイユ
生まれ変わって動物たちと一緒に生活したい
ホイットマン

二〇三一年、十二月三十一日、午後七時。

郷田はキッチンで、蕎麦打ちをやっている。
手作りの年越し蕎麦を、ギャバンにふるまいたいのだ。
ギャバンは郷田のお手並み拝見である。
マドレーヌからメールがきた。
はじめは、今年一年お疲れ様との内容だったが、
「おや、麻暮先生らしき人を見かけたとの情報が」
「えっ、どこで、だれが」
蕎麦切りをしていた郷田は、危うく指切りをしそうになった。
「ブローニュの森の奥の奥。
ええと、森の研究者が、そこで猿の群れを見た、そのなかに人間らしき者の姿が」
「それだけかい」
「それだけです」
「それが、麻暮さんだと云うのかい」
「だって、そう考えたくなるのが人情でしょう」
「それはそうだが、あの森に猿なんかいるのかい」
「ですから、突然発生」
「蝗じゃあるまいし」
「でも、麻暮先生らしくありませんか」
「らしい、らしい」
「どうしますか」
「ギャバン探偵としてはどうするね」
「まあ、じたばたしてもしかたありませんから、マドレーヌさんの次の情報を待ちます」
「それがいい、それしかないね」
「もし、もっと確実な情報が入ったら、僕はパリに飛びます」
「そうしてくれ」

郷田は蕎麦を茹で始める。

蕎麦に乗せる天麩羅はすでに揚げてある。

若く食欲旺盛なギャバンのために、海老、烏賊、竹輪、南瓜、蓮根、人参、春菊の、七種の天麩羅を用意した。

郷田本人は、一杯のかけそばで充分なのである。

そこに、葱と柚と三ッ葉を少々乗せて、七味をたっぷり振り掛けるのが、郷田の流儀である。

先日、ラーメンを作った。

ギャバンの願望で、焼豚を十枚と野菜炒めを、たっぷり乗せてあげたが、郷田の流儀は、葱とメンマを乗せただけである。

そういう蕎麦、そういうラーメンが旨いのである。

もりそばも、つけめんも、天麩羅や焼豚を添えると、そばやめんを食べているのではなく、天麩羅や焼豚を食べているのと同じことになる。

そういうことが、ギャバンにはまだ解らない。

そういうことが解るようになれば、日本での探偵稼業もやりやすくなるはずだが、すくなくとも十年はかかるだろう。

結局、探偵と云っても、板前や職人とあまり変わるところがないと、郷田は考えている。

麻子の年越しはベビーフードである。

母親がいなかったためか、離乳食を口にするのが、他の赤ちゃんよりも早い。

ベビーチェアに坐った麻子に、ギャバンはスプーンで食べさせてあげている。

郷田が、卓上に年越し蕎麦を運んでくると、ギャバンは、器用に箸を使い、ちよっぴり蕎麦をつまんで、ベビーフードの上に乗せた。

そうして、蕎麦がまじったベビーフードを麻子に与えた。

「麻子ちゃんも、年越しで一す」

麻子はためらわずに、それを口にした。

異変は、三分後か五分後か、どちらにしても、ギャバンはまだ蕎麦をひと啜りと、天麩羅をひとつしか食べていない。

麻子の様子が、みるみるおかしくなった。

白い顔が赤くなる。

丸い眼が吊り上がる。

桃色の唇が紫色になる。

柔らかな髪が立つ。

麻子は泣くこともできないらしい。

すぐに、顔が二倍近くに膨れ上がり、呼吸が烈しくひどく苦しうになった。

ギャバンはうろたえて急に立ち上がり、蕎麦のどんぶりをひっくりかえした。

「ど、ど、ど、どうなってるのー」

ギャバンはさげんだ。

郷田が慌てて、麻子の様子を見る。

「これはきっと、アナフェラキシーだよ。

ギャバン君、ベビーフードの他になにか食べさせたかい」

「お蕎麦をちょっぴり」

「げっ、蕎麦アレルギーだ」

郷田はすぐに救急車を呼んだ。

大晦日なので、遅くなると云っていたが、郷田は事情を伝えて、一秒でも早く来てくれと声を荒げた。

(マドレーヌさんがいたらなあ)

と郷田はおもった。

それでも以前、依頼人が同じ症状になって、そのときの体験から、郷田は麻子の口に自分の口を張り付けると、おもいきり吸った。

胃に入ったものをぜんぶ吸い取るつもりだった。

おおよそ吸い取ったと感じた郷田は、こんどは麻子の口にストローを入れた。

アナフェラキシーでは舌も二倍三倍と膨れ上がるので、膨れ上がった舌が喉を塞いでしまうのである。

麻子の呼吸がやや楽になった感じがした。

救急車が到着し、病院に運んでからでは間に合わないので、すぐに麻子に点滴をした。

副腎皮質ホルモンの点滴であるが、赤ちゃんなので、注意深く処置した。

みるみる麻子の様子に変化してきた。

十五分も経ってはいない。

赤かった顔が白くなる。

吊り上がった眼が丸くなる。

紫色の唇が桃色になる。

立った髪が柔らかくなる。

麻子が一声だけ泣いた。

「これで一安心です」

救急隊員が云った。

「念のために、これから病院に運びます」

「解りました、ぼくが付き添います」

郷田が云った。

ギャバンは立ち尽くしている。

「僕もいきます。

万一のことがあったら、麻暮先生に殺されます」

「それなら一緒に。

「ぼくの車で救急車の後をついていこう」
「はい」

二〇三一年、十二月三十一日、午後十時。

というわけで、郷田とギャバンは、湘南緊急病院のICU前の廊下に佇んでいる。
「麻暮先生には云えませんか」
「麻暮さんには云えないよ」
「僕が悪かったんです」
「いや、年越し蕎麦を作ったぼくが悪い」
「麻子ちゃんには可哀相なことをしました」
「可哀相だったね。
ぼくらだけでは無理なんだよ」
「保育所に預けましょうか」
「それがいいかもしれない」
なかから医者が出てきた。
「もう大丈夫です、いつでも帰ることができます」
その後、看護師が麻子を抱いて出てくると、代わりに慌ただしくICUに入った担架がある。
郷田とギャバンはおもわず顔を見合わせた。
(カトリーヌちゃんじゃないか)
郷田は、こんなに蒼い顔の、カトリーヌを見るのは初めてだった。
その後で、駆け込んできたのは、蝶子である。
郷田とギャバンを一瞥しただけで、自分もICUに飛び込んだ。
麻子を抱いたギャバンが看護師をつかまえて、
「ぼくは患者の家族です。
カトリーヌさんは、どうしたのですか」
看護師はまったく疑うことなく、
「コカインの過剰摂取です。
意識がありません」
「げっ、そうきましたか」
ギャバンは絶句した。
郷田はギャバンに耳打ちする。
「ギャバン君は、麻子ちゃんと家に帰ってちょうだい。
ぼくはこの病院になんとか留まって、カトリーヌちゃんの容態を確認するからね」
「はい。
どうか、お気をつけて」

ギャバンは引き上げて行った。

二〇三一年、十二月三十一日、午後十一時半。

郷田はまだ湘南緊急病院にいる。

郷田は強引に麻子を担当した看護師をつかまえると、しつこく麻子の今後の対応を聞いていた。

もちろんそれはかりそめであって、カトリーヌの様子を見るために、ずっと病院に居残っていたのである。

看護師の話で、カトリーヌの意識が戻り、一般病室へ移されたとのこと。

付き添っているはずの蝶子のことを聞くと、ついいましたがた安堵して帰ったとのこと。

郷田は看護師に、じつはカトリーヌは、自分の内縁の妻であると告白し、その証拠として、スマホに入れたふたりの写真やメールのやりとりまで見せて、なんとか病室での付き添いを認めてもらった。

郷田が病室に入っていくと、カトリーヌは眼を瞑っていた。

しかし郷田が手を握ると、薄く眼を開けて、その眼から涙を零した。

「ごめんなさい」

とカトリーヌは唇だけで云った。

「心配したよ」

と郷田は云った。

しばらくして、(だいぶ落ち着いたカトリーヌがペットボトルの水を飲んでから)、郷田はできるだけ優しい声で云う。

「もうすぐ除夜の鐘になるよ。」

つまり、今年が終わって、新しい年がくるんだ。

いろいろあっただろうが、ぼくは探偵を廃業したから、なにも聞かない。

明日、ここを出て、家に帰ろう。

病院には守秘義務があるし、荒野大人が警察にはすでに手を回してあるはずだから、君が捕まることはない。

ただその前に、ひとこと云わせてもらおうなら、君はもうひとりじゃないってことなんだ。

パリでは姉さんが君を大切におもっているし、日本ではぼくが君を大切におもっている。

もちろん、荒野大人やお蝶さんの、百倍もおもっているんだよ。

だから、中毒の対応に関しては、どうするか一緒に考えよう。

まだ慢性的にはなっていないはずだから、お互いの努力できっと元に戻る。

そうそう、ぼくと結婚するのが厭なら、それはそれで構わない」
ここまで喋ったとき、ギャバンからメールが入った。

【大変なことになりましたネットニュースによるとブローニュの森の猿たちが森を荒らしたり観光客に危害を与えると理由によりパリの議会で「猿撲滅決議案」が可決されたとのこと麻暮さんが猿の群れにいるとの情報が本当なら麻暮さんの身が危ない因みに猿撲滅実行責任者はセリーヌ警部とのことです実行予定日は一月十日これからマドレーヌさんにもメールを送りますが何か伝えることはありますか】

顔を硬直させた郷田が、返信のメールを送っていると、どこからか除夜の鐘が響いてきた。

郷田にはたしかに、「諸行無常の響き」に聴こえた。

二〇三二年、一月七日、午後九時。

郷田とギャバンと麻子とカトリーヌの四人は、JALパリ行き機内にいる。

その後カトリーヌに、中毒症状は出なかった。

蝶子のところへ行きたい、とも云い出さなかった。

郷田と結婚したい、とも云い出さなかった。

カトリーヌはいつも静かで慎ましかった。

郷田と一緒にキッチンに入り、正月料理の作り方を教わったりした。

郷田はカトリーヌに対して、フランスはどうか知らないが、日本では薬物は暴力団の資金源になっているから、もう決して手を出してはいけないと、こんこんとお説教するとともに、返信はないと知りつつ、蝶子に対しては抗議のメールを送った。

ギャバンは鎌倉に探偵事務所を開設したばかりで、この一件が最初の事件だと考えていた。

とうぜんのごとく、ギャバンの鼻息は荒かった。

この一件とはもちろん、セリーヌ警部の指揮のもと、一月十日に実行予定の、ブローニュの森の猿撲滅である。

機内ではさっきからずっと、ギャバンと郷田が、この一件について話し合っている。

「問題はセリーヌ警部の出方だね」

郷田が云った。

「猿の群れのなかに麻暮さんがいたなら、発見は時間の問題だって、セリーヌ警部からメールをもらっていますから、まずは麻暮さんを猿の群れから救出した後で、猿撲滅活動を展開するでしょうね」

ギャバンが云った。
「普通はそう考えるんだが、麻暮さんもセリーヌさんも普通じゃないからね」
郷田は苦笑しながら云った。
「と云うことは、郷田先生のお考えでは」
「あのね、先生はもうそろそろやめてよ。
麻暮さんだって、先生と呼ばれることを厭がっていたでしょう。
先生と呼ばれて脂下がっているのは、日本では三流政治家と三流作家と三流芸能人だよ」
「それでは、郷田さんのお考えでは」
「うむ、それがさあ、じつに悲観的な考えになるんだよね」
「まさか」
「うむ、もしかすると、いやおそらく、パリ警察と森の猿族との、血腥い激戦」
「しかし」
「うむ、それを否定したいのはやまやまだけれど、たとえば猿族が麻暮さんを簡単に手放すのかどうか。
あるいは麻暮さんが、猿族から引き離されるのを拒むとか」
「でも、セリーヌ警部が穏便に」
「だって、パリの議会で可決されたのは、猿撲滅決議案だろ。
フランス語ではどうだったか知らないが、撲滅ってのはね、麻薬撲滅とか害虫撲滅とか、そういうときに使う言葉だからね。
それに、警察官は探偵とちがって、上の指令には従うよう教育されているんだ」
「フランス語でも、撲滅です」
「なら、打ち滅ぼし絶やすことだ。
保護でも捕獲でもない」
「それは困りましたねえ」
「うむ、困った」
「困りましたねえ」
「困った」
「やはり、セリーヌ警部の動き出す前に、森へ入って、麻暮さんを探し出すしかありませんね」
「それしかない、それしかないんだ」
郷田は自分に云い聞かすふうに云った。

二〇三二年、一月八日、午後九時。

郷田、ギャバン、麻子、カトリーヌ、そしてマドレーヌも、ホテルメグレの一番大きな客室に居る。

さきほど一緒にディナーを食べ、明日の対応を協議した。
郷田は、朝からブローニュの森の奥へ入る。
ギャバンは、セリーヌ警部と交渉をするため、パリ警察へ行く。
しばらくホテルに滞在してもよかったが、カトリーヌは本人の希望でマドレーヌのマンションへ行くことになった。
麻子は、カトリーヌとマドレーヌにおまかせすることになった。
だが部屋に戻ったとたんに、
「やっぱり私もダーリンを探したいわ」
マドレーヌが云いだしたので、カトリーヌも、
「それならわたしも」
と云いだし、郷田は頭を抱えた。
すると、ギャバンも、
「なら、僕も行きますよ。
だいたいセリーヌ警部が、交渉に乗ってくるとはおもわれません」
郷田は頭を抱えたまま、
「もういい、もう解った。
ぼくがいけなかった、ぼくがみんなを強制してしまった。
こうなったら、みんな一緒に行くしかない。
考えてみれば、みんな一緒に行くしかない事態になっているんだ。
みんなで行けば怖くない」
「決まりましたね。
それでは、エイエイオー。
さあ、みんなご一緒に、エイエイオー」
ギャバンは拳を振り上げた。
みんなつられて振り上げた。
どういうわけか麻子も振り上げた。

二〇三二年、一月九日、午前六時。

郷田、ギャバン、麻子、マドレーヌ、カトリーヌは、ホテルメグレの玄関にいる。
まだパリは薄暗い。
予定通りの出発である。
ホテルの朝食には間に合わないので、前夜に郷田がメグレの厨房を借り切って、
ご飯を炊き、おにぎりをいっぱい作った。
具は、日本から持ってきた、梅干し、昆布、かつお節、高菜、たくわん、らっきょう、福神漬、佃煮など。
みんなで半分食べて、残りの半分は、麻暮ゆずりの七つ道具を入れたリュックに

押し込んだ。

予約した大型タクシーがきて、みんなは乗り込んだ。
郷田のほかは、なぜかピクニック気分である。

二〇三二年、一月九日、午前七時半。

タクシーを降りた五人は、森の奥へ奥へと歩いている。

「うむ、奥が深いな」

郷田がつぶやくと、ギャバンは、

「郷田さんみたいですね」

と得意のお世辞を云った。

「奥が浅いのがぼくの悩みさ。

奥が深いとは、麻暮さんみたいな人を云うんだよ。

麻暮さんが電撃隊と戦ったのは、このあたりかい」

「そうです、まさしくこのあたりです」

ギャバンはまだ、血の臭いが漂っている気がした。

「となると、この先の先が臭いね」

「僕も、ここから先は行ったことがありません」

たしかに人通りはまったくなく、樹々の上にはかぎりなく明るい朝陽が皓々と照っているはずなのに、ここは黄昏時よりも暗い。

麻子はギャバンに抱かれ、マドレーヌとカトリーヌは手をつないでいる。

寒気が強くなり、あるいは武者震いなのか、ギャバンが麻子を抱いたまま大袈裟に震えた。

マドレーヌとカトリーヌは、いつの間にか手を離して腕を組み、体を密着させている。

ふと、ギャバンが声をあげる。

「おお」

「どうしたの」

「いま、お猿さんの声がしませんでしたか」

「ぼくには聴こえなかったが、最近耳が遠くなっているせいかな」

郷田は苦笑した。

ギャバンが聴こえたと言うなら、きっと猿の声がしたんだろうと、郷田は耳をすます。

「また、聴こえました」

ギャバンが確信にみちた声で云った。

郷田にも聴こえた気がした。

「よし、もっと奥に進もう」

すると、こんどは郷田にもはっきりと聴こえた。

しかも、無数の声が。

「猿だ、猿の群れだ」

「いよいよですね」

「いよいよだが、さて、どうするか」

「なぜか、喰い殺されるような予感がします」

ギャバンは、麻子を庇うように抱きなおした。

「うむ、ここからは、ギャバン君とぼくだけがいいな」

郷田は、麻子をマドレーヌに渡すよう促した。

「わたしたちは、どうすれば」

マドレーヌの問いに、郷田はちょっとだけ思案して、

「この場所で、三十分だけ待ってちょうだい。

ぼくたちが戻らなかったら、先に引き上げてちょうだい」

「もどらないって、どういういみですか」

カトリーヌが不安そうな声をだした。

「猿に喰い殺されて、戻らないのではない。

猿の仲間になって戻らないんだから、心配は要らないよ」

「なるほど、仲間になるんですね」

「そうだよ。

すくなくとも敵じゃないってことを、ちゃんと示さないといけない」

郷田はリュックから、バナナの房をとりだした。

「おやまあ、用意万端ですね」

ギャバンは呆れたのではなく、感心したのだ。

「さあ、仲間になりに行こう。

万一、猿の群れに麻暮さんがいるなら、初めから仲間さ」

「そうですね、怖がらずに行きましょう」

ギャバンの声は、いささか震えていた。

「麻暮さーん、麻暮さんはいますかあ」

森の奥に向かってギャバンがさけぶと、ほとんど同時に、マドレーヌとカトリーヌのさけぶ声がした。

郷田は急ぎ足で引き返す。

マドレーヌとカトリーヌが呆然と立ち尽くしていた。

「どうした、なにかあったのか」

「麻子ちゃんが、麻子ちゃんが、猿にさらわれたのー」

マドレーヌが泣き声で云った。

「麻子ちゃんが、猿に」

はじめ郷田は、事情が呑み込めなかった。

そして、

(しまった)

と声にならない声を発した。

(やっぱり一緒にいるべきだったんだ)

郷田は一瞬、麻暮のことを想った。

(麻暮さん、すまない、すまない)

「ごめんなさい、ごめんなさい」

マドレーヌもカトリーヌも泣くが、もはやどうしようもない。

ギャバンも走ってきた。

「郷田さん、こうなったら、お猿さんの群れに、突っ込むしかないですね」

「そうするしかない」

郷田はリュックから、ジェット噴射器をとりだすと、自分の足とギャバンの足にしっかりと据え付けた。

(第四部了)